

## 9. 建築物

### 9-1. 家の建て方

敷地に当たる部分の草を刈る時に家の大きさの見当を付ける。草を刈り終わると、東南隅に一本柱を立てて標準の柱とする。そこから東北隅にシナの木の皮で作った紐(ハリキカ harkika)を張る(トゥシアッテ tus atte)。その時に、中間に仮竿を持った人が立ち、見当を付ける(インカラ inkar)。長さは手を広げて計る。この計りをパカリ(pakari)といい、両手をひろげた長さをテム tem という。シネ テム sine tem, トゥ テム tu tem, レ テム re tem と計る。次ぎに東南の柱から西南の方に紐を張り、西南の柱を決める。次ぎに西北の柱を決める。

屋根の壁をふく草は前日までに用意しておくので、敷地の草を刈り、柱を立て、壁と屋根をふくまで一日で仕上げる。チセカラ cisekar とはこの敷地の草刈りから家全体が建ておわるまでを指して言う言葉である。敷地をチセ カラ コツ cise kar kot という。チセコツ cisekot は家のあった跡地を言う。

家の頂上をふく(チセ パ カラ cise pa kar)のも終わり、家の四周がすべて完成すると、その晩にはもう寝泊まりできる。戸口から入り、炉を作る。

家の向き：家の間取りは、南北に長い長方形で、家を東西にながく建てるとう川を堰きとめることになるから忌み嫌う。

家の建て方：東側から建てはじめる。柱は、イクシベ ikuspe と言う。草刈りをして敷地を決めたあと図39の①東南隅に最初の柱を建てる。柱は上部が二又木(マッカ)になっており下部は尖らしてある。それを両手で持って打ち込むので力のない人は二人でやる。力のある人(キロココクル kirorkokur)でないと一人でできない。①から紐を東北に張り②東北隅の柱を決める。次に①から西南に向かって紐を張り③から北に向かい紐を張り④西北隅に柱を建てる。

(図39参照)

#### 柱の名称

①ロルン イクシベ rorun ikuspe

②ウサラ ワ アン イクシベ usar wa an ikuspe

③オシソン ワ アン イクシベ osison wa an ikuspe

④オシソン ワ アン ウサラ イクシベ osison wa an usar ikuspe (翻訳調のアイヌ語のように思われる。)

次に間柱を南側から建てる。この柱を⑤ノシキ アン タンネ イクシベ noski an tanne ikuspe という。次ぎに同じ間柱を北側に建てる。これを⑥ウサラ ワ アン タンネ イクシベ usar wa an tanne ikuspe という。イテメニの外側に立つ。

(以前の調査ではこれらの間柱を総称して、リイクシベ *ri ikuspe* とおっしゃったので確認すると同一ものである事がわかった。)柱の材料としてはヤチダモ(ピンニ *pinni*)かドスナラ(ブンカウ *punkaw*)である。

次に⑤⑥の上に棟木を渡す。リクンニ *rikunni* という。南北に二尺ほどながく出る。

東(①②)と西(③④)に南北に走る桁(トゥリ *turi*)をそれぞれ①②と③④の股木に二尺ほど外に出るようのにせる。この桁の長さは普通の家で3間から4・5間であり、オツテナ級の家では7から8間である。その股木の上にイテメニ *itemeni* 梁を載せる。まず南にある梁(ロロワ アン イテメニ *roro wa an itemeni* または ロルン イテメニ *rorun itemeni*)の下部を図40の如く削り(きっぱを入れる)柱にはめこむようにする。次ぎに同様に北の梁(ウサラ ワ アン イテメニ *usar wa an itemeni* または ウサラ イテメニ *usar itemeni*)を柱にはめこむ。桁の上に次々と一間毎に南から(ロルン トウタヌ アン イテメニ *rorun tutanu an itemeni*)梁を並べていく。真ん中の梁を特にノシキ アン イテメニ *noski an itemeni* という。南と北の梁は紐で固定するが他の中間の梁は切りこみをいれるだけで固定する。

垂木はサクマ *sakuma* といい、屋根に縦に載せ棟木の上に載せる。棟木も桁も二尺ほど南北に出ているのでその上に置くとひさしとして二尺くらい出る。一間に三本くらいの間隔で切れこみをいれて棟木と桁にはめこむ。垂木は、屋根の頂上で草を敷くと隠れてしまう。

次にこまい(イサマニ *isamani*)をサクマと直角に屋根の上に置く。垂木の下から上へと一尺間隔に置く。これをイサマニ コテ *isamani kote* という。屋根は西側から葺き屋根の頂上部で東側に一段多く出る。

図39. 柱を立てる順序

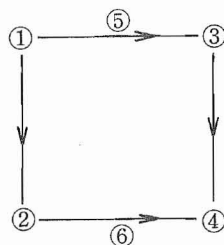
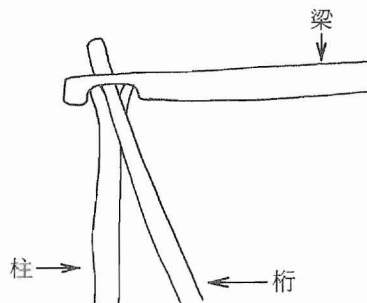


図40. 柱、桁、梁の結合



柱は、10年以上ももつが、柱が腐る(イクシベ ムニン *ikuspe munin*)と新築する(アシリ チセ カラ *asir cise kar*)。柱だけを取り替えることはなく、まったく新しく建て直す。

### 逆木について

家を立てる時に逆木について昔の人は喧しく口うるさく言っていた。南北に柱や桁を渡す時には南に木の先端が、北に根元が向き、東西では、東に先端、西に根元が向き、上下では上に先端、下に根元が向くようにする。同様に壁や屋根をふく草も根元が下に向くようにする。この理由は陽の当たる方向が東や南なので、生きている木の成長する方向に合わせているのだ。

### 屋根のふき方

野崎コタン付近は西風が強いので、屋根の西側を先にふいて最後に草の先端を東側の屋根の方に折り曲げ、更に東側の屋根をふく時に草の先端を重ねるようにして、「押しぼこ」(イサマニ isamani)で押さえる。イサマニは今の釣り竿くらいの太さでヤチダモ(ピンニ pinni)で作る。

更にその上に屋根の頂上部(チセパテパケ cise pateppake)に直径二尺くらいの草の束を置き並べポンアツ pon at(おひょうの木の皮のひも)かシナの木の皮のひもで縛る。屋根をヨシでふいた時にはヨシを屋根の頂上部に載せ、ヤチダモでふいている時にはカヤを載せる。カヤは長いもので7~8尺、短いもので6尺ある。短いものを使う時には重なる部分をなるべく少なくするように並べていく。雨があたると腐り易い為である。この作業は男が一人で行う。女性の仕事は屋根をふく時に草を屋根に手渡しで上げる仕事である。草を屋根に上げる事をムン リキンテ mun rikinte という。

### 家を建てる人

家主が棟梁(チセ カラ アシカイ クル cise kar askay kur)である事が多いが、成人に達し結婚し一人前の者でなければならない。棟梁は、①. 柱を立てる時に、曲がらないで真っ直ぐになるように注意する。②. 逆木を使わないように注意する。例えば、イテメニは東が木の先(ウラ)で西が元(モト)であり、トゥーリは南が先で北が元である。もし、逆木(ホロカニ エイワンケ horkani eiwanke)であるとわかると建築を直ぐに中止する。材料を取り換え新たに建て直さなければいけない。

資材は家主が用意する。立ち木を見て、これはトゥーリに、これはイテメニにと判断する。この準備には何日かかってもよいが、柱を立てはじめるとその日のうちに建ておわらなければならない。家を建てているあいだに家族に不幸があつたりすると家を建てなおさなければならない。汚れがあつた(シウエンクンネレ siwenkunnere)からである。

家族が総動員で手伝う。父、母、長男、姉、子ども(ポーホ poho)(ポネカチ ponekaci)などである。そしてコタンに家が増えてくると、隣近所で手伝い合う。エチセ カラ エイワンケ モンライケ クキ e-cise kar monrayke ku-ki「お前の家作りを俺は手伝うよ。」

### 新築儀礼

チセイノミ cise inomiには新しい家で酒を作る必要があり、これには5日くらいかかるので、家が完成してから一週間か10日後にチセカムィノミを行う。

酒作りはイチャリ icari(ザル)で酒を漉してクーシントコ kusintoko(たが付き行器)に

入れる。正しくはクッコロシントコ *kutkorsintoko*、クーコロシントコ *kukorsintoko* という。5～6升の米で二斗樽に二つくらい作る(熊送りの時には二俵くらい作る)。イナウは前の晩に作っておく(イナウケ *inawke*)。

イナウの種類は、①ベッコロカムイ *petkorkamuy* 川の神、②カントコロカムイ *kantokorkamuy* 空の神、③チュッカムイ *cuQkamuy*、これは太陽の神 シリペケレチュプカムイ *sirpeker-cupkamuy*、月の神 クンネチュプカムイ *kunnecupkamuy* の事である。④ヌプリシクカマカムイ *nupurisikkamakamuy*…これにはピンネシリ *pinnesir*(雄阿寒)、マッネシリ *matnesir*(雌阿寒)、モコトヌプリ *mokotonupuri*(藻琴山)のために別々にイナウを作る。*sikkama*とは「お守りする」という意味である。⑤ルーチシクカマカムイ *rucis sikkama kamuy*(美幌峠の神)である。

ヌサの前で酒をタカイサラ *takaysara* の付いたトゥキに入れ、パスィスイエ *pasuysuye*(酒箸を上下に揺ら)シイナウに酒をふりかけると酒もイナウもそれぞれの神のいる所に届く。例えば、美幌峠に届く訳である。

シラリ(*sirari* 酒粕)は女、子どもが好む。

イノミとカムイノミは同じ事である。男の先祖の霊を祭る儀礼をエカシイノミ(*ekas inomi*)、女の先祖を祭る儀礼をスツイノミ(*sut inomi*)という。熊送りの時の神々にイナウを届ける祈りをイオマンテイノミ *iomante inomi* という。

チセイノミの儀式の時の座の配置は、図 41 の如くで、右座に主人と奥さんが坐り、主人の後ろに上座から下座にかけて長老達が坐る。おとこの正座はあぐらでキモソロア *kimosor a* という。女性は左座に坐る。酒盛りをする時、客の前に一人に一つずつ並べたお膳に置いたタカイサラの付いたトゥキにイオマレクル *iomarekur* が酒を上座から順に注いで回る(イオマレ *iomare*)。イオマレクルは、シントコからペサク(*pesaku* ひしゃく)でエトゥニブ(*etunip* 片口)に酒を移し、客に対座してエトゥニブの上に置いてあるペサクを右手で引き寄せ、お膳の正面でエトゥニブの口(エトゥニブ *チャロ etunip caro*)から注ぐ。トゥキやパスィは、主人が用意し、使用しない時にはイコロサン *ikorsan* に置いてある。このトゥキやパスィの数で財産が知れる。女性にはイタ(*ita* お膳)を据えない。赤い色のイタンキ(フーレントンキ *húre itanki*)のみを持ち、パスィももっていない。(シネ イタンキ コレ *sine itanki kore* 椀一つのみも持たせる)。男の持つトゥキは黒い漆塗りで模様が付いているが女性のイタンキには模様がない。

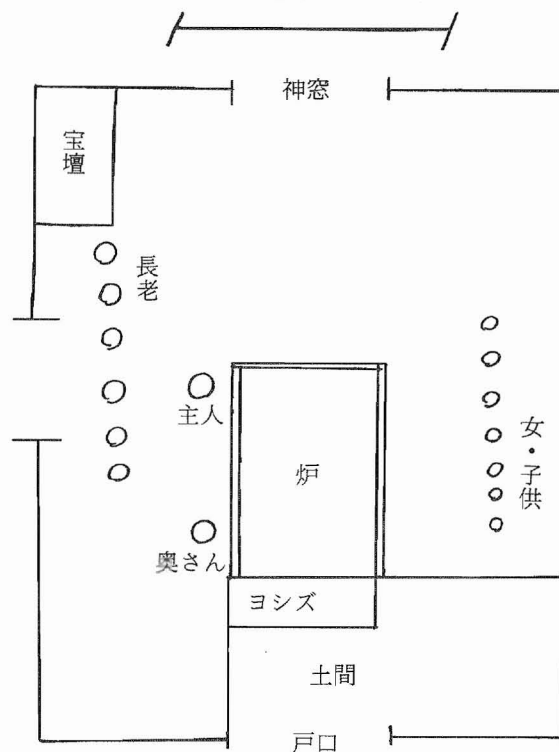
酒が注ぎ終わると家長が炉の前(アベ サン *ape san < ape sam*)で祈りの言葉(イノンノイタク *inonnoitak*)を火の神に捧げる。

火の神へのイナウ(アペシトウイナウ *apesituinaw*)は三本ある。一本はオンネアペシトウイナウ(*onne ape situ insw*)とかポロアペシトウイナウ(*poro ape situ inaw*)と呼ばれ高さ一尺くらいで炉の上座と右座の炉縁木の交差する隅に置かれる。二本のポンアペシトウイナウ(*pon ape situ inaw*)は割箸くらいの高さである。主人の前の炉の中に火ばさみ(アペオツニ

apeotni、ラスパニ (raspani サビタの木) で作る) でおき (ウサツ usat) を集め上座寄りと下座寄りに二つの山を作り、それぞれ炉縁寄りに一本ずつボンアベシトウイナウを立てる。上座寄りのイナウはロロワ エカシ (rorwa ekas) のためのイナウで下座寄りのイナウはウサラワ フチ (usarwa huci) のためのイナウである。イナウは祈り (イノンノイタク inonnoitak) が終わるころ炉の中 (アペソ オシケ apeso oske) へ倒れるように自分で考えて (ヤイコサヌ yaykosanu) 立てる。炉縁の方に倒れる (アベシトウイナウ ヤン apesituinaw yan) ことのないようにする。

[美幌・菊地股吉氏]

図41. 新築儀礼の座の配置



## 9-2. 家の内部構造

炉は家族の全生命を養うものであるから大切である。だから、家の内部では第一番目に作る。炉縁木をイウンベ iunpe~イユンベ iyunpe という(イヌンベとは日高方面の言い方である。) 炉縁木は神窓側のオロルンイユンベ ororuniyunpe を木の根元を西に先を東に向けて置く。次にハリキソワアンイユンベ harkiso an iyunpe を木の根元を北に先を南に向けて置く。次にオシソワアンイユンベ osiso wa an iyunpe を置く (元は西、先は東)。炉を切り終わると炉の中央 (アペソノシキ apeso noski) で火を燃やす (アペアレ apeare)。この火入れ式には家主がキリポスマ (kirposuma 脂石) とヤスリ鉄 (カネ kane。馬そりの裏金のように細長い。) を擦り合わせて火を起こす (このキリポスマとカネの一組をプイチ puyci) という。次の日からは奥さんでも娘さんでも火を起こして良いが第一日目だけは家主が行う。

床作り

地面の上に草を上座から東西へと敷く。左座と右座では南北に敷く。これをソクカラムン sokkar mun (或いはより正確に言うとソーカラムン sokar mun)。その草の上にイテセ (itese 編む) したヨシズを敷く (ソクカラ アマ sokkar ama)。上座 (オロルン ororun) から敷き始める。東から西の方へ重ねながら敷く。ヨシズの頭 (ソクカラパ sokkar pa) を東に向ける。ヨシズの下 (ソクカラケシ sokkar kes) は編み終わりの糸 (イテセ トウシ itese tus) の結び目があるのでわかる。次ぎのヨシズの頭を最初のヨシズの下にする。同様にして、右座、左座、下座とヨシズを敷いていく。ヨシズの敷き方、上下の方向を間違える (イホロカ ihorka) と、敷き方が違うと言って、チャランケ caranke (談判) になる。

### 宝壇

イコロサン ikorsan 宝壇を家の東南隅に作る。宝の量の大小で宝壇の大きさも異なる。ソクカラのうえに枕木 (イコロサンニ ikorsan ni) を南から北に置く。間に二本くらいの木を入れる。その時も、先は東に元は西に向ける。その上に横木 (イコロ アamani ikor amani) を三本くらい連ねて渡す。先は南に元は北に向ける。

### 寢床

ホッケソッキサン hotke sotki san。これは大きな家のオツテナ級の人が作り、普通の人は作らない。右座のウサラ寄りに作る。これはノミが多いのでそれを嫌って作るものだ。又木を4本置きその上に宝壇と同様に丸太木の元と先を考えて木を並べる。2尺くらいの高さになるので、その上に草を敷き、更にソクカラを敷く。できあがり高さ2尺3寸くらいで、長さ(南北)7~8尺で幅(東西)が6~7尺である。ここにはは主人と奥さんが一緒に寝る (ウトウラ ホッケ utura hotke)。背の高い人 (ケウエルイ kewe ruy) は少し長めにする。頭は南に向けてねる。和人と同じように北枕をすると次の朝に人が死ぬ (ニサッタ ライ nisatta ray) と言われていた。上座で寝る場合は、東に頭を向けて寝る。寢床の東か西にイミアッテ クマ (imiatte kuma) という着物掛けを置く。2本の又木の上に横木かハリキカを渡す。

### 火棚

火棚はパラカ (paraka) といい、イテメニ itemeni (梁) にポンアツ (pon at) かハリキカ (harkika) で縛り付けられた股状の木四本にぶら下がっている。その上にサキリ sakir (棚の上の横棒) を20~30本並べる。火棚のサキリの上に魚や熊、鹿の肉を置いて薫製にする。

### 神窓

ロルンプヤラ (rorun puyar) は、南のリーイクシベ (ri ikuspe 棟持ち柱) の東寄りに作る。大きさは、三尺幅で、高さは腰までで低くても (ラム ram) 高くても (リー ri) いけない。物を出し入れするので腰までの高さが最適である。壁のイサマニ (isamani 横木) が丁度神窓の上下に走っている。だから、窓枠は特に必要ない。窓の下に来るイサマニは床面より少し上で短いので木の根元を東に向けなくても良い。逆木の例外的なものである。

### 東窓

家の主人が坐る直ぐ後ろに作る窓でオマカシアンプヤラ (omakas an puyar) と呼ぶ。ヨシ

で編んだヨシズ（普通よりも少し大型のもので窓よりも大きめである）を窓に垂らす。これをイテセアプッキ (itese aputki) と呼ぶ。天気の良い時には巻き上げておく。曇っている時や吹雪の時にはヨシズを降ろしておく。冬もヨシズでよい。時にはヨシズを二枚かける時がある。

〔美幌・菊地股吉氏〕

### 9-3. 家の周囲

#### ヌサ

ヌササン nusasan(祭壇)は南向きに作る。家を新築した時にはアシリ チセ イノミ asir cise inomi の前にヌササンを作る。ヌササンはロルンプヤラ rorunpuyar から10間以上も離れている。家によって遠い(トウィマ tuyma)ヌササンと近い(ハンケ hanke)ヌササンがある。遠いものは16~7間離れている。熊送りは、ヌササンとオンネチセ(onne cise 大きな家)との間で行う。

ヌササンが南向きなのは、太陽が照らしてくれる方向で、太陽は東から昇り南を通って西へ沈むからである。川も南から北へ流れている。南は川上(ペツパ petpa)だから、頭は全てが尊いからそちらの方にヌササンを向ける。川上は川の流れたす源でヌプリ(高い山)で高い山は尊いものだ。藻琴山にも雷の神(フムユッケコロカムイ hum yuQke (<yupke)kor kamuy)が宿っていると言われている。雌阿寒、雄阿寒もヌプリで神が宿っている。北見と阿寒の間の峠も(アカンルーチシ akan rucis。美幌でヌササンにイナウを立てないが阿寒湖ではノミするはずだ。阿寒には秋辺音吉という偉大な村長がいた。)阿寒川(アカン ペツ akan pet)と網走川(チバシリ ペツ cipasir pet)の水源である。美幌峠(ルーチシシクカマカムイ rucis sikkama kamuy)は、屈斜路湖へ注ぐ川と古梅経由で美幌川(ピポロペツ piporo pet)へ注ぐ上流との境であるから美幌でノミをする。山と言ってもヌプリと言われる高い山しかノミしない。ヌササンと神々の居る所とは通じているのである。

#### イナウの種類

普通のイナウはヤヤンイナウ yayan inaw と呼び、ヌサに捧げる神々へのイナウである。チカブイナウ cikap inaw は鳥の神に捧げるイナウで羽が付いている。

#### 倉庫

美幌では日高のような高床式の倉庫はない。祖父の代、父の代にはトィプー toypu 土の倉である。実際に見た事はないが、父はトィプーエイワンケ キ (toypu eiwanke ki) したと言っていた。土の倉を家の南西寄りにヌササンと同じくらい、10間くらい家から離れて作る。大人が少し腰を曲げて(ポンノ ルィケ ponno ruyke<rewke)出入りするくらいの高さである。少し地面を掘り下げ木の骨組みをする。土の倉へは南にヌササンがあるので避けて通り、西回りで行く。夏も冬も使えた。魚類、肉類などを保存した。ルィベ(ruype 凍らせた魚)など夏でも食べられたという事だ。父の代にはじゃがいもなどを入れた。

阿寒湖では冬でも氷に穴を開けて(コンル ペレ konru pere、コンル スィ カラ konru



suy kar) カバラ チェブ kapar cep (ヒメマス) を釣る (アパッテ apatte) ので倉庫は必要なかったのではないか。阿寒で倉庫は見た事がない。

#### 乾燥設備

魚の乾し竿 (チェブ サッケ クマ cep satke kuma) は家の東南寄りに作る。二本の又木の柱を立て横木を一本置く。犬が飛び付かず、人の手の届くくらいの高さにする。長さは9尺くらいは必要である。イナウは特に立てない。肉は外で乾す事はない。肉はサカンケ(sakanke ゆでる)して家の中のアペソ(apeso 炉)の上で乾す(サカンケカムサッケ sakanke kam satke)。これは虫がわからないようにするためである。

#### 水汲み

2・3軒共同で井戸を掘った(スンピイ オウリ sumpuy ouri)。二尺くらいの深さで木枠もなく余り水は流れていくようにした。井戸を掘ると沸き水が出てくる(ヤム ワクカ エトゥク yam wakka etuk)。新しい井戸を掘るとシトウイナウ(situ inaw)を井戸の神(スンピイ カムイ sumpuy kamuyと ワクカコロ カムイ wakka kor kamuy)に捧げた。これはカムイノミする時に時々立て替えた。井戸のない家は、川に水汲みに行った。第二ウイントクの母親(ひいばあさん)が元町に住んでいて90何歳かでなくなる時に ペッコロワ ワクカタ pet or wa wakkata「川から水を汲んで来い」と言われた。死に水を汲みに行った訳だ。

#### ゴミ捨て場

ソクカラムン sokkarmun (床に敷く草)が腐って(ホスセ hosse)臭い(フララ hurar 言い誤りか。フラ hura かフラアツ hura at ではないか。)がしてきたらタイペ オスラ(taype osura ゴミ捨て場)に捨てる。これは家の西北寄りに家から10間ほど離れた所にある。魚の骨チェブポネ cep pone)はゴミと一緒にほしない。ゴミ捨て場の少し南に捨てる。魚の骨は粗末に扱えないからである。粗末に扱えば、トゥスクル(tusukur 巫術者)がトゥスして騒ぎだす。

動物の骨は、ヌササンの側に持って行く。熊の骨はもちろん、鹿の骨(ユクポネ yukpone)もヌササンの側に置く。ウサギの骨もヌササン近くの清潔な所に置き、魚の骨と一緒にほしない(タン ポネ アマ ワ エク tan pone ama wa ek「この骨を置いて来い。」)。

動物の毛皮は粗末に扱えない。もし、粗末に扱おうと罰が当たる(カムイ エアツ kamuy eat)。トゥスクルに言われる。ヌサの西北の方にひっそりと隠れて捨てる。

灰(ウナ una)は、家の西北に魚の骨を捨てる近くにあるウナオスラ(una osura)に捨てる。灰は火の神の垢(アペウチ トゥール ape uci turu)だから不潔な場所に捨ててはいけないと言われている。

この地方ではヒエ・アワがないので糠(ムル mur)捨て場はない。

チェブケリ cep kerri は魚の骨と別な場所に捨てる。ケロムン(keromun)は、古くなると出してタイペ taype (ゴミ)として捨てる。

[美幌・菊地股吉氏]